

ふれあい活力ゆとり

すみだ



## 墨田区の誕生から、いまをたどる④

# すみだが進んだ歴史

明治時代から墨田区の誕生まで  
文明開化の明治維新を迎え、江戸は東京と改称されて首都となり、西欧文明の急速な流入とともに、近代化への脱皮も徐々に進んでいきました。  
明治11年（1878年）、15区制が実施されて、南部区域が本所区となり、北部区域は南葛飾に編入されています。当時の生産品といえば、南部では瓦、髪結具、ろうそくなどの日用品、

### おもてなしの心と町の魅力

墨田区は江戸庶民文化の発祥の地であり、その文化や歴史が今日に引き継がれています。また、ものづくりの町としても発展を続けてきました。

一方、平成23年度には、約610メートルの自立式電波塔としては世界一高い新タワーが押上・業平橋地区に建設されることが決定しており、今年の夏にはいよいよ着工する予定です。

区では新タワーの誕生に向けて、新たな区基本計画にもとづき、タワー関連事業がスタートしています。

墨田区観光振興プラン（20年2月改訂）では、「新タワーを活かし、住んでよく、訪れてよい『国際観光都市すみだ』をつくる」ことを目標に掲げています。北斎の魅力や多彩な江戸文化を楽しめる北斎通りのまちづくり、新タワーから放射状に伸びる主要道路をタワービュー通りとしての整備、水都すみだの再生などのシンボル事業を計画しています。（詳しくは区ホームページ又は観光課へ）

しかし、区民の皆さんが来街者をおもてなしの心で迎えることも、すみだのまちの魅力となります。

そのためには、区民の皆さんがすみだについての多くの情報をもつことも必要なことから、すみだ地域学セミナーなどの講座を開講し、また本紙ですみだに関わる情報を提供します。

北部では農作物でした。現在の墨田区の地域は、河川に囲まれた好適な立地条件や労働事情が、工業地帯としての地歩を固める要因となつて、わが国における諸種の軽工業の発祥の地となり、近代工業地帯としての東京の枢要な地域を形成するに至りました。  
特に、紡績、精密工業、石鹼製造、製靴が盛んで、大正期には、輸出向けとして、玩具製造、ゴム工業などが興り、発展しました。

一方、交通面では、27年（1894年）総武鉄道佐倉～本所（錦糸町）間が開通し、35年（1902年）東武鉄道が、また大正元年（1912年）京成電気軌道が開通するなど、相次いで交通網が開けています。

しかし、12年（1923年）9月1日、関東大震災によって東京の市街地は大きな被害を被

りました。なかでも、南部区域は地震とそれに伴う火災のため、9割の人家が失われ、死者も4万8千人と東京市全体の8割強に達する惨状を呈しました。

やがて、復興期を経て、都市化が進んだ北部区域には、昭和7年（1932年）向島区が成立し、15年（1940年）には両区を合わせ人口は48万人（戦前・戦後を通じ最多）となっています。

しかし、第二次世界大戦の戦火により、再び区内の約7割が廃墟と化し、6万3千人の死傷者と30万人近い被災者を出しました。

特に、20年3月10日未明の東

京大空襲では、本所区の96%、向島区の57%が焦土と化し、り災者は両区で28万人余にも及び、2万6千人余の命が3時間近い空襲によって失われたのです。

大戦が終わって間もない22年（1947年）3月15日、本所と向島の両区が一つになり、「墨田区」が誕生しました。新区名は、遠く平安の昔から、江戸、東京の名とともに広く親しまれた墨堤、隅田川の地名から「墨」と「田」の2字が選ばれ、名づけられたものです。

当時の人口はわずかに14万人でしたが、やがて焼け跡にも住宅や工場が建ち、産業のまちとして復興を始めました。

墨田区観光振興プラン（20年2月改訂）では、「新タワーを活かし、住んでよく、訪れてよい『国際観光都市すみだ』をつくる」ことを目標に掲げています。

